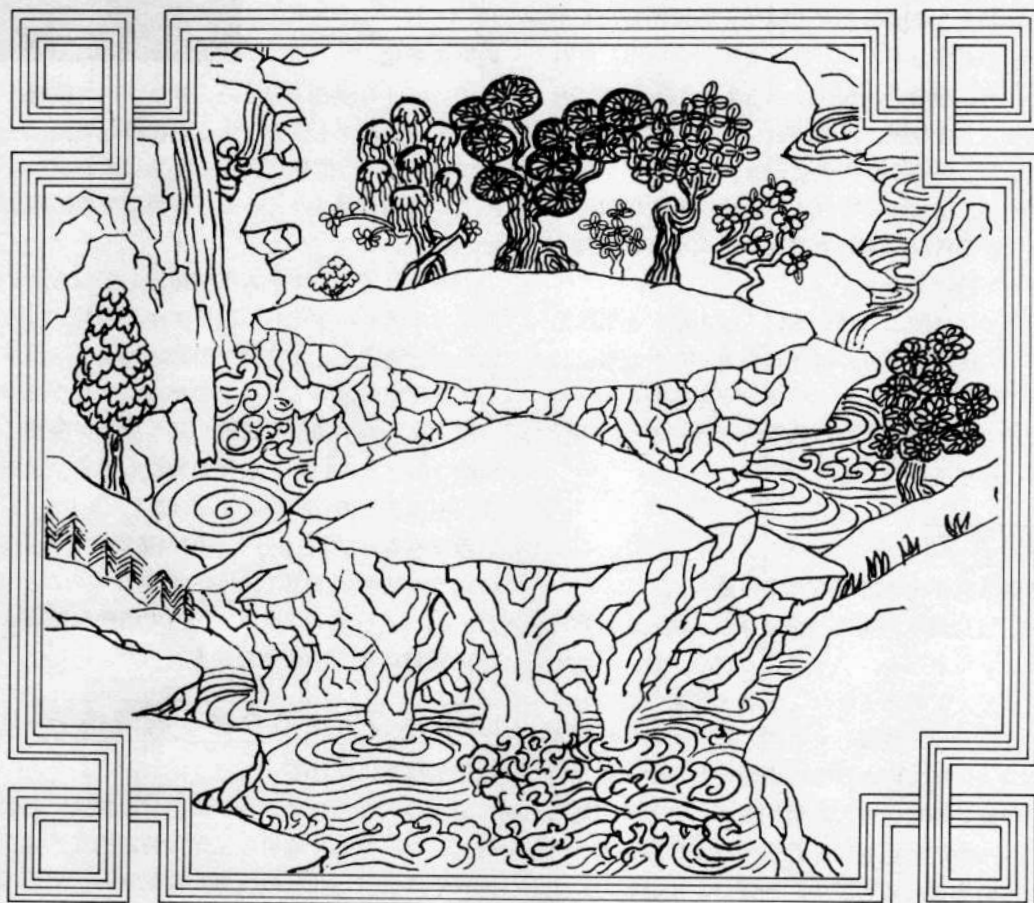


Trial & Error No.107

トリアル・アンド・エラー

試 行 錯 誤



悠久の大地

特集 インドシナの新しい道

カンボジア近況報告	2
カンボジア・プログラムの現状	4
「激動するベトナム」	6
ベトナム・プログラムの現状	8
ラオスの新しい道	9
インドシナ難民における自発的本国帰還	12
エチオピア緊急報告 サンタの来ないエチオピア	14
サラワク・スタディーツアーを終えて	16
サラワクのジョクさんと日本	18
「春。子どもの記念日」 寄付始まる	22

カンボジア近況報告

本橋 栄

カンボジアをとりまく国際情勢、カンボジア国内の状況は過去2年間ばかりの間にずいぶん変化した。和平交渉の進展はもどかしいまでにのろいが、それでも最高国民評議会（SNC）がともかくもでき、国連が関与しての停戦、総選挙というシナリオができた。しかし、いまだに内戦は続き、カンボジアが国際社会から正式に承認されず、政治経済的に孤立させられている状況に変わりはない。人々は辛抱強く平和を待ち続けている。

カンボジアに関してはいろいろな不確定要素があって、今の段階で今後の見通しを語ることは難しい。まずはここ1年半ばかりの全体の変化を振り返って、いくつかの問題点をあげ、JVCのプログラムの現状と今後の展望を述べてみたい。

国内の状況

商業活動の活性化と広がる貧富の差

85年5月以降私営企業が公認され、輸入が容易になり、シンガポール、タイからの商品が量、品数ともに目に見えて増えてきた。土地・家も売買されるようになり、家を改装して外国人に貸すといふ収入になる。タイからの衣料や日本製の古着が、人々の服装を色鮮やかにさせ、日用雑貨にいたるまで輸入品が市場や商店に目立つ。元手や商才のある人々はどんどん財を蓄えているが、物価は1年前の倍以上になり、庶民の生活は圧迫されている。貧富の差が開きつつあるのが目に見えてわかる。

一方農村に大きな変化はない。しかし地域によっては2年続きの雨不足や治安の悪化、ソ連からの肥料の削減で米の収穫が減り、91年は全体で約10万トンの不足が予想されている。リエルは下落を続け、1年半前の3分の1になっている。政府は国防の出費とソ連・東欧の援助引き揚げで深刻な財政状態にある。賄賂もさまざまなレベルで横行している。

これまでカンボジアでは自由化政策が取られてきたが、社会主義陣営の世界的な変化の中で、むしろ自由化の行きすぎによる弊害をいましめ、一党独裁制を守ろうとする勢力が政府内で発言力を増している。90年9月～12月には各省で大幅な人事移動が行

われた。

内戦の激化

91年の1月現在で見ると、プノンベン政府とクメール・ルージュを主力とする三派軍の戦況は一応落ちついている。乾期に入ってから政府軍が攻勢に出て、12月にはスパイチェック付近で攻防戦があったと聞く。

89年9月末にベトナム軍が撤退してからタイ国境近県での戦闘が激化し、徴兵制がしかれ、村人や公務員が自警団として交替で動員された。三派が占領している地域は限られたものだが、ゲリラは国内深く潜入し、橋や道路を爆破したり列車を襲撃して政府側を悩ませている。地雷の敷設も増え、足を失う農民も後をたたない。90年にはクメール・ルージュとの戦闘を避けて約15万人が国内避難民となった。このような状況は80年代初期の混乱以来のことであった。JVCを含めカンボジア国内で活動している国際援助団体の多くが緊急援助を行った。

カンボジアを取り巻く国際情勢

政治的解決に向けて

ジャカルタ、バンコク、東京での何度かの会談を経て、プノンベン政府と三派で暫定的な政体、最高国民評議会（SNC）の設置が構想され、以前は国連に対して不信感をあらわにしていたプノンベン政府も、国連議席の空白化を前提に国連関与による選挙を受け入れることに同意した。7月にはアメリカがカンボジア政策を転換させ、国連における三派連合政府支持をとり下げた。

さらに8月末、国連安全保障理事会の常任理事国、米中ソ英仏によって「包括的解決の枠組み」が合意され提案された。各派は9月にジャカルタでこの提案を原則的に受け入れることで合意、さっそくバンコクで第1回のSNCが開催されたが、議長の選出で意見が一致せず、実質的な討議に入れなかった。そのためSNCは10月の国連総会に代表を送ることができず、カンボジア議席は空席となることが決まった。12月に関係国はパリに集まり、包括的解決の枠



カンボジアの街の声ー I

街の人々に、現在の生活、停戦後に不安はないか、今の楽しみなどについて聞いてみた。

MS氏 — 40代、某省局長、英仏語堪能、昨年スウェーデンに研修に行った。ポルポト時代に妻子を失い、再婚。

1～2年前に比べて副収入を得る機会は増えたが家族を養うのに手一杯なのは変わらない。都市では金持ちが特権的に富を築いているが、貧しい人々はどんどん貧しくなっている。

フンセンは「平和のきざしが見える」と言ったが、各派の政治的意見の違いは大きく、和平に向けての政治状況はまだ基礎ができていない。カンボジア情勢にはもうウンザリだ。国連が来るのは大歓迎。すべての派が武装解除され、国連が一定期間とどまるのがよい。

SSさん — 女性、30代、外務省職員、東欧勤務の経験あり。日本語を勉強中。庭に製氷装置を持ち氷を売っている。夫と男の子2人。

生活は毎日のように向上している。収入は増えた（海外の親戚から送金あり）。外国にいる親戚との連絡、カンボジア国内の外国人との接触ができるようになった。

平和が来るのを確信している。不安はない。停戦は中国・アメリカの武器援助の停止しだい。国連が入って選挙になったら、個人的には政府に投票する。援助が大量に入っても何も問題はないと思う。



車が増えたプノンペン市街

楽しみは子供たちといっしょにいること。子供はまだ小さいが、ひとりはパイロットに、もうひとりは医者になりたいと言う。そうさせたいし、できると思う。

Nさん — 女性、30代。輸入品を扱う商店の店番。子供はない。ひっきりなしに来る客や商売相手とのやりとりの合間をぬって。

最近は扱う商品の種類が増えた。毎日の生活は普通。外国人の客は多いが言葉がわからないから話はしない。

国連が来て選挙をすることについて不安はない。政治のことはよくわからないし、心配してもしかたがない。頭が痛くなるだけ。

Sさん — 男性、30代。JVC付某省運転手。奥さんは市場で古着を商う。1男2女あり。

収入も上がったが、物価はもっと上がった。生活はあまり変わらない。国連が入ってくることについて不安はない。援助も歓迎する。

将来は自分の家や車が持ちたい。子供にはいい教育を受けさせてやりたい。

組みの内容について協議したが、プノンペン政府は選挙までの期間に現政府を解体、武装解除することに強い難色を示している。

少しずつ開かれる世界への窓

難行する和平交渉をにらみながらも、和平後に向けての根回し、準備活動はさまざまなレベルで進められている。89年夏から西側各国の外交官が日本も含めて非公式に訪問。国連も2度にわたって実情調査団を派遣した。以前は国連の承認がないため活動していなかった国連開発計画（UNDP）も事務所を開設し、ユネスコの視察団も到着した。

80年代はじめから、少数の民間援助団体はプノンペンで活動を行ってきたが、ここ2年ばかり、これらの援助団体を通じて使われるオーストラリア、イギリス、ECなどの政府資金の拡大が目立つ。民間援助団体の数、スタッフ数も89年夏と比べ倍近くに増え、人の往来はますます活発になってきた。

90年秋にはバンコク、シンガポール、パリ、ブリュッセルから直行便がプノンペンに乗り入れるようになり、外の世界が近くなった。国際電話、国際通信も大幅に改善され、また西側諸国もカンボジア人の入国ビザを出すようになるなど急速に変化している。

カンボジア・プログラムの現状

本橋 栄

難民帰還後に向け技術学校の充実をはかる

技術学校では90年9月から第3期の授業が開始された。新年度に間に合わせ、生徒たちが静かに授業を受けられるよう、教室、実習棟を新築した。カリキュラムを編成しなおし、授業の進行と平行して教科書作りが進められている。従来から指導に当たってきた日本人と運輸省輸送局の技術者に加えて、日本に留学経験のあるカンボジア人技術者が入ったことで教科書の翻訳などが可能になった。

ワークショップでは、輸送局のトラックや援助団体の車両の整備・修理が行われている。90年末には、国連がNGOに貸し与えている車両の整備・修理を行う新しいプログラムが始まった。

当面の課題としては、新しいカリキュラムによる授業を軌道に乗せ、教科書を完成させ印刷すること。生徒の中から能力・意欲のある人材を先生として養成すること。90年度には旋盤を入れることができたが、今後も財源を見つけて検査機械などの機械設備を充実させることによって、技術学校を日本の職業訓練校レベルにもっていくことである。

まだ具体的にいつ動き出すか予想できないが、政治解決後タイ国境にいる難民をカンボジア国内に帰還させるための計画が、UNHCRを中心に練られている。JVCとしては、難民や物資の輸送に使われる車両の整備・修理に関して、技術・人材の面で一定の役割を果たすことができると見ており、条件が整えば動き出したい。

ひとたび政治解決が実現すれば、国連などの車両も急増するものと見られ、また、政府間援助や企業の進出によって、大規模な車両整備工場が作られることは間違いない。いずれはJVCが手を引く時が来るかもしれない。そうであっても現在の技術学校/ワークショップが大型車両整備の技術学校として存在価値のあるものとして残っていけるよう、日々内容の充実を計っている。

母子保健活動―地域の医療スタッフを支援

JVCは88年、カンダール県のプロノンベン郡の郡病院を拠点に活動を開始した。RINE センターを建て、下痢による脱水症状の子供への補水(R)、予防接種(I)、栄養補給(N)、母親への教育(E)などを行っ

てきた。車で村をまわるモバイルRINE も続けられている。

89年から保健省の母子保健局が行う村の助産婦、伝統産婆トレーニングを支援し、まずプロノンベン郡で実施、90年にはカンダール県他の2郡、クサイッカンダール郡とコトム郡に広げた。トレーニングを終了すると器具道具類が配布され、保健省から必要な薬が届くようになる。またカンダール県が進める栄養トレーニング、つまり3歳以下の子供の発育状態の測定と、栄養失調児への対応を郡単位で支援することになった。すでにプロノンベン郡、クサイッカンダール郡、コトム郡について終了した。

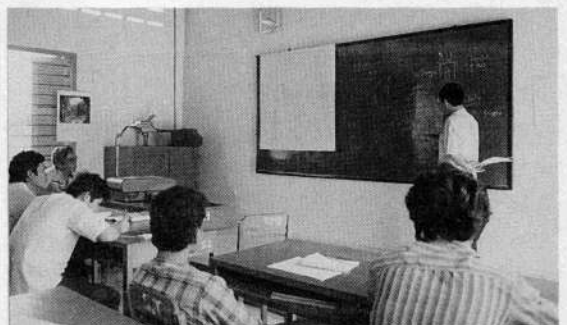
プロノンベン郡では栄養失調児の多い村(クム)で3歳以下の子供全員の発育状態の測定を行い、村長さんらを集めてその原因と対策について話し合った。生活用水、あるいは家庭で野菜を作るために水が必要ということで、ため池掘りを支援した。

子供の栄養・発育は村や各家庭の経済問題とつながっている。戦後の日本がそうであったように、今後和平が成立し徐々にカンボジアの経済状態が改善されれば、人々の生活状態も全体的に向上していくものと思われる。現在NGOは国や県、郡の行政を通して村人に関わるしかないが、やがてはより草の根の関係が作れるようになっていくだろう。

国内情勢に左右される井戸掘り活動

86年以来、JVCは農業省の水利局に協力して、他の民間団体OXFAM、LWSと共同で掘削機械による井戸掘りを進めてきた。

90年に入るとカンボジアの国内情勢の影響をもろに受けることになった。90本の井戸を掘る計画だっ



ワークショップの授業風景

カンボジアの街の声－II

Mさん — 女性。20代。仕事をしながら夜学で学び、プノンベン大学に入って英語を専攻している。4人姉妹の長女で父母はポルポト時代に死亡。

生活は良くなっているし、将来に対し不安はない。戦争が終わるのはうれしい。公正な選挙によって人々が望む結果が出ることを希望している。国の再建のために学校や病院を立てたりする援助は必要だが生活様式の違う外国人があまりたくさんプノンベンに一度に入ってくるのは好ましくない。物価が上がったりいろんな影響があると思う。

今のカンボジアの状況はちっともハッピーでない。お金持ちはどんどん豊かになり、貧しい人々はさらに貧しくなっている。個人的には勉強していろいろな事を知るのが楽しい。

(他の学生たちはどう考えているかという質問に対して) みんなも、誰かに強制されるのではなく、公正な選挙によって人々が将来を選ぶことを望んでいると思う。

Lさん — 農民。50代。プノンベン郡クム・マカッ出身。仕事を探しにプノンベンに出てきた。村には0.6haの田んぼと0.5haの畑、牛2頭を持ち、年を取った両親と病気がちの妻、未婚の子供4人がある。長男は3年間兵隊に行っていたが耳を患って戻ってきた。

生活はあまり変わらない。物価が上がって困る。国連が入って選挙が実施されることに不安はない。戦争が終わるのはうれしい。

田畑を耕す仕事をしている時が楽しい。

だが、政府から支給されるはずの燃料のディーゼルが、品不足と政府の予算不足でなかなか手に入らず予定が遅れた。また3月ごろから国内各地で、内戦による戦闘のため国内避難民の移動が起こり、その対策に水利局のスタッフや機材も動員された。避難民の定住地での井戸掘りはまだ続けられている。

これまでユニセフやNGOが支援してカンボジア国内で掘られた井戸は、大型の掘削機による数十メートルの深井戸であるが、90年から小型の機材と揚水ポンプと組み合わせた井戸掘りが試みられるようになった。どこでも掘れるというものではないが、地質、地下水源の状態によっては、20～30メートルで充分きれいな水が得られる。また、比較的安く、村人が参加して掘ることができるのが利点である。JVCとしても、今後の井戸掘り、給水活動の方向性を検討している。

今後の課題

カンボジアはこれまで政治的理由で、国連や西側諸国のODAによる開発援助を受けられないまま、ポルポト時代の荒廃から立ち直らなければならなかった。道路港湾、かんがい水路をはじめとする社会基盤の建設・整備に援助が期待されているが、何を優先順位とし、個別の計画をいかに国全体の長期的な復興開発計画のなかに統合していくのか、明確な

開発政策が必要とされる。

また、急速に近代化が進められると予想されるが、環境破壊など近代化にともなって起こりうるゆがみにどう対処できるのか。カンボジア人自身による政策決定、および円滑な実務処理のための体勢づくりと人材育成が急がれる。

カンボジア国内の援助に関わってきたNGOのフォーラムがこの問題に焦点を当て、経済政策の専門家をカンボジアに招き、その調査報告にもとづいて、カンボジアの開発に関するデータバンクと人材養成のための研究所を、プノンベンに設立する準備を進めている。オランダ政府などいくつかの国が資金援助を約束しており、援助する側の見識の高さを感じさせる。

具体的には和平成立後、多数の国連や関係者などがプノンベンに入ってくると、特に、建設資材や食品、住宅などの不足・値上がりが予想される。またどの部門でも対外的な実務のこなせるカンボジア人は限られるので、優秀な人材ほどそちらの方に取られてしまい、通常の仕事が停りかねない。

首都の上下水道といった、他の開発途上国ならば国際機関やODAが受けもつような大きな仕事までも、カンボジアではNGOが政府を相手にして担ってきた。今後、よりNGO本来の役割と関わり方を探る時期がやってくる。なすべきことは山積みしている。

「激動するベトナム」

中川 春野

“自由化”に輝いた 89年

「激動するベトナム」これはバンコクのある旅行代理店の 1989 年のキャッチフレーズである。たしかに、私たちが初めてベトナムの地を踏んだ 89 年の夏からの 1 年間、「激動」は目に見え、肌を感じられるものだった。建設ラッシュ、日ごとに増えるカフェやディスコ、溢れる商品、日々活発になって行くさまざまな規模の商業活動、外人に気軽に話しかける人々……。

1990 年のテト（旧正月、ベトナム最大の祝日）には、大勢の外国人が付き合いのあるベトナム人の家に招かれた。2 年ほど前までは、国連の現地職員として働いている人でさえ、オフィス外では外国人と接触できなかったことを考えると、大変な違いだ。扇風機、ラジカセ、テレビは大方普及してしまって、ビデオ、冷蔵庫、洗濯機などが今盛んに売られている。まだまだ自転車が主流ではあるが、バイクの増え方には恐いものがあり、個人所有の自動車などというものも見かけるようになった。

2～3 年前までのものすごいインフレも嘘のように落ちつき、米ドルとベトナムの通貨ドンとのレートは闇でも公式でもほとんど差がなくなっている。「消費は美德」とまではいかなくとも、「派手にお金を使うとご近所に疑われる」時代は去り、「金持ちは偉い」の風潮が急速に広がっている。公務員はじめ、人々の収入は相変わらず低いそうだが（公務員の月給は 30～40 米ドルぐらい）、それまでの「ぜいたくは敵」の時代に使えずに貯めこんであった金銀でもあるのか、信じられないような高額の買い物を普通の人々がやっていた。たとえば、ビクターのテレビは約 1000 ドル、中古のホンダカブは 2000～3000 ドルするのだが、目に見えて増えている。人々の服装も、くすんだ色の作業服ばかりだった数年前とはがらりと変わって、おしゃれでカラフルなものが増えている。優雅な民族衣装アオザイも復活し始めた。

保守化への揺り戻し

ところが、89 年のわくわくするような開明気分は、90 年に入って揺り戻しにあっている。ほとんど自由になったかと思われた外国人との接触を再び「遠慮」



ハノイの市場にもモノが増えてきた

する人が出てきたし、外国人がベトナム国内を旅行の際に必要な許可証が、ずっと取りにくくなった。ハノイにある大学に招かれて、英語教師のボランティアとして単身働いていたアメリカ人 NGO スタッフが、突然、反社会主義思想宣伝とスパイ活動の容疑で国外退去になった事件（90 年春）は、ベトナムの「不自由」を象徴しているように思える。

湾岸危機のあおりを受けたガソリンの値上がり、それにつられるようにして起こった物価高、インフレは人々の生活を圧迫している。といっても、テトの前には例年物価が 4～5 割ほど上がるので、今年はそれが少し早くから始まっただけだ、と楽観している人たちもいるし、市場は相変わらずの賑わいを見せている。

ドイモイ（刷新 — 経済再建政策）で、最近気になっていることは、①各省独立採算制になってから、どの省も手段を選ばず金儲けに走っていること、②権威機構が、刷新の結果今まで以上に複雑になり、担当者に自分の管轄下のことがよく解らず、組織間や部署間での権限争いや責任の押しつけ合いが起きていること、③ドイモイの目玉である「経済解放」「外国資本の誘致」に逆行するような法令が矢継ぎ早に出されていること、などである。

というわけで、ベトナム人に「ベトナムの最近の変化についてどう思いますか」と尋ねても、率直な意見を聞くことはまだ難しい状況だ。そこで「模範解答」と思われるものを一つと、ベトナム語に堪能な日本人留学生、秋葉亜子さんの協力を得て、おしゃべりの中から拾ってもらった生の声をいくつか紹介する。

ハノイの街の声

真面目な知識人（翻訳者、詩人）

何よりの希望は、新しい思想、民主主義の息吹が感じられることだ。今までになく、個人の利益、個人の働く権利、個人の人格が尊重されるようになってきた。自由経済が受け入れられ、商店や工場、さらには銀行にも民間経営のものが出てきた。技術も進んで、商品の品質が格段に良くなった。

良くないことといえば、インフレだ。物価は上がっても収入は変わらないから、生活は厳しい。ベトナム人は忍耐強く貧乏に耐えてきたが、永遠に続けるわけにはいかない。戦争で失ったものも大きいし、外国からの援助は必要だ。去年から外国資本が入ってくるようになったが、残念ながら南部に片寄っている。外国からの投資が今の10倍になれば、ずっと良いのだが…。えっ、経済侵略だと思わないかって。いや、ベトナムの独立と尊厳、互惠の原則さえ保証されれば、国外からの投資はいくらでも歓迎だ。

私自身のこと？ 私は三つの分野の学位を持ち、英語とフランス語を大学で教えたこともあり、アメリカ文学の翻訳では賞も取った。しかし生業だけでは苦しいので家庭教師のアルバイトをしている。これまでは肉体労働者ばかりが重んじられて、頭脳労働者は大事にされてこなかったが、ついでの間「労働者と農民と知識人」という表現を目にした。これはうれしかった。出版の仕事も検閲がずっとゆるやかになり、やりやすくなった。

私はアメリカかどこかの大学で、ベトナム文学を教えたいと思っている。いや、向こうに永住するつもりはない。どんな状況であろうと、祖国を捨てるのは間違っている。私はベトナムのすばらしい文学を紹介したいし、知的刺激を受けたい。

普通のOL（18歳）

2年前はね、本当に何もなかったのよ。夜、おながが空いたら大通りのうどん屋まで食べに行かなきゃいけなかったの。今は家から一歩出れば屋台がたくさん出ているから、何だって食べられるようになったわ。バオカップ（国家丸抱制）のころ

は、国のお店で何か買う時は券が必要だったし、それ以外の所だと値段が国の10倍くらいもして、とっても買えなかった。

でもねえ、ドイモイがあって、商売をしている人たちがすっごくお金持ちになったでしょ。それで物価も上がっちゃって、うちみたいな公務員はお給料が低くて大変なの。えっ、先のこと？ わっかんないよ、そんなの。

大学の先生（50代）

まず、大きな変化は三つ。ひとつめは食料に困らなくなったこと。ふたつめは衣料も含めた日用品がふえたこと。三つめは交通が便利になったこと。

でも、医療も学費も以前は国が全額出してくれていたのが、今は自己負担になって、経済的にも苦しくなった。専業以外に何か副業をしないと、とてもやっていけない。子供の多い家は本当に大変だよ。国は近いうちに収入の多い家には税金をかけるって言っているが、その基準だってまだはっきりしていない。

今後の問題点としては、工業技術の未熟さ、管理体制の未熟さなどが上げられるね。それと、外国からの投資も重要なポイントになると思う。

新卒男子（21歳）

街にモノが増えたと思わない？ 店は前からあったけど、何もなかったものなあ。券持ってさ、並んで買ったんだぜ。しかも店員の愛想の悪いことっていったら、もう最低。国営デパートで店員に声をかけたら、怒鳴りつけられたことがある。でも今はサービスが悪かったら、別のところへ行って買っちゃうから、店員も朝から晩までニコニコするようになったよ。

まあ、ほかの国に比べればベトナムはまだまだ遅れてるけどな。でもさ、5年前に比べたらすごく良くなってるんだぜ。あのころは食べる米もなくなって、いつも腹をすかせてたんだ。嘘みたいだろ。

ベトナム・プログラムの現状

稲見 圭

北部（ハイフォン市）

1990年10月2日、遅れていたUNHCRとの契約を調印し、私たちJVCベトナムチーム（熊岡、中野、稲見）は11月現地ハイフォンに入った。以来、カウンターパートであるハイフォン市労働・傷病軍人福祉局（以下、労働局とする）と協力して、帰還難民と地域住民のための職業訓練プログラムを実施してきた。調印が遅れたせいもあって、すでに電気と洋裁のコースの一部は、JVCの到着を待たずに労働局側独自に実施されていた。

一方JVCがとりわけ協力を求められている、自動車修理コースは、1月現在まだ始まっていない。ワークショップの建設、機材等の購入を急いでいる。

①電気 最初のコースは1クラス34名、期間は91年4月10日までの8カ月間。ラジオやテレビの構造、修理技術を学ぶ。うち6名が帰還者で、2名の女子生徒がいる。すでに8名の生徒がやめているが、多くは授業のレベル、スピードについていけないことからくる怠けが原因であって、家庭の経済的理由ではないと所長はいう。

理論学習の必要性から週2回英語の授業もあるが、自主参加、有料のせいか最近参加者が減っている。今後の改善が待たれる。

②洋裁 12月13日、3カ月コースがスタートした。1クラスのみで30名、うち18名が帰還者で男子は1名だけ。現在4人の先生とともに、電気クラスの隣室で青い上着を作成している。黒板の脇に足踏みミシンが20台並んでいる。さぼっている生徒を前のお茶屋さんで見かけたりするが、概して今のところ出席率は良いようだ。

どちらのコースも、人件費の問題を抱えている。特に公務員の水準に合わせて設定されている先生の給料は時給0.1米ドル程度で、これでは質の良い先生は雇えないという。0.7米ドルあればいいのだが。

奨学金も、予算額が小さいので、訓練の過程で使用、生産した物を各自に与え、また出席率向上も兼ねて、優秀、まじめな生徒に何か褒賞を出すことを計画している。電気クラスなら各自に授業で使ったラジオ、優秀者に工具セットを、また洋裁クラスなら各自に自分で作った洋服を、優秀者で卒業後自分の店を持ちたい者にはミシンを贈る等を考えている。

③自動車修理 本格的に動き出すのは4月以降になると思われる。一つにはワークショップの建設が3月末にならないと完成しないこと、もう一つは機械設備、教材の中古車など、日本からの輸入が必要な物の入手に、手続き上もう少し時間がかかりそうだとすることが理由として挙げられる。

現在はハイフォンにて中野、熊岡が労働局側の専任スタッフと話し合いながら、具体的なプログラム内容の計画を立てている。だいたいは中野が既に日本で考えていったものに基づくが、現地の状況を踏まえてさらに細かい計画を作ろうとしている。

④木工 優先順位が自動車修理コースより後になっているので、いまのところ労働局側の専任スタッフも決まっていず、コースがスタートするのは早くても5月か6月になる見込み。

自動車と木工のワークショップの建設は、昨年末、今後、訓練終了後の就職先をどう確保するか、また就職につながる訓練内容とは何かをよく調査、研究しつつ活動していく予定である。

南部（ホーチミン市第8区、ビンチャン郡）

この南部のプログラムはJVC独自のプログラムで民間からの資金支援に頼っている。

昨年1月及び3～4月の現地調査に基づき、7月より、熊岡が中心となって、4つの柱として教育、福祉、医療保健、職業訓練を立て、おもに設備、機材、人材育成面での協力支援を実施してきた。この11月から12月にかけて熊岡、中野、稲見が訪問・調査を行い、12月までに約2万5000米ドル相当の支援を行った。

3月には熊岡とともに岩崎駿介代表が現地を訪問する予定。

今後、ホーチミン市にも常駐スタッフを置くことを考慮中である。

*今までに支援した機関・団体

①ホーチミン市第8区

ヒーボンスクール（聴覚障害を持つ子どもたちの学校）、第1地区ティントゥオン夜間補習学級、トゥオイサイ学級（ストリートチルドレンのための識字学級）、レイイ小中学校、区立病院・産院、区立職業訓練所、視覚障害者組合

②ビンチャン郡

フォンフー地区小中学校、郡立病院、レーミンシア地区診療所

ラオスの新しい道

ラオス代表 谷山 博史

変わる農村

ラオスの旧王都ルアンパバーン(ルアンブラバン)に行ったときのことである。短い滞在期間ではあったが、女性同盟の案内で郊外の村の様子を見てまわった。この地域は山岳地帯なので山岳民族が多く、焼き畑などで陸稲を作っている。私が訪ねたナーン郡でも、農民の多くは自給用の陸稲を作っていた。

ところがこの郡では、伝統的なこの生産方式をやめさせるために新しい作物栽培を指定する。つまり、郡政府は農民が自給用の作物を作ることをやめて、輸出用の作物を作らせようとしているのである。「自分で米を作って食べるよりも、大豆を作って売った金で米を買った方がずっと割がいい」といって換金作物を作ることを奨励している。ポリサック・レックハーというラオスの食品会社が、生産技術と1ヘクタール当たり年5000キップ(=1000円)の貸付金の提供を受け持つ。そしてこの食品会社に資金を援助しているのがECである。山奥の村がすでに国際市場経済に巻き込まれている。

このほかにも、農民の生活に商品経済が入り込んでいる例はいくらでもある。ヴィエンチャン市では政府が化学肥料の普及宣伝をし、政府の銀行が化学肥料購入の資金を貸し付けているのもその一例である。しかも、こうした農村経済の変化は、ラオス政府が経済の自由化に踏み出したここ3~4年の間に急激に起こってきたものだ。隣のタイが30年かかってたどってきた、農村の自給自足経済の崩壊と原料の市場への転化が、ここラオスではより短い期間に起こるとすれば、借金の累積、環境破壊といった農村生活への影響はより深刻である。

カムムアン県のラオ村では稲作の自給自足が中心だが、米は普通6カ月しか持たない。米が尽きてしまったあと、村人は余裕のある家庭から融通してもらったり、近くの森に入って竹の子、木の葉、小動物を取って食べている。村人の相互扶助と森の恵みが村人の苦しい生活を支えている。しかし最近この村人は、県都のタケックの小資本家から年率260%という高利で米を借りるようになった。村全体で100トンは借りているらしい。村人が米を外部のも



山から伐り出された切り株

のに借りなければならなくなった理由の一つに、周辺の森林が商業伐採で減ってきていることがあるらしい。このように周囲の自然と調和して生きてきたラオス人の生活が、急激な近代化による環境破壊によって変化を余儀なくされている例は、ほかにも枚挙にいとまがない。

失われていく織物文化

農村経済の変化と環境破壊は互いに密接に関連している。同じように文化の問題も環境破壊や経済と関連しながら、今後ラオスを左右する大きな問題になっている。先に述べたような、ラオス人の森との共存のあり方や相互扶助の協同社会のあり方が、自由化に伴う物質文明や商品経済の流入によって、衰微していくのが現在の趨勢である。同時に、ラオス人の文化的基盤がテレビやラジオ、商品、観光客などの影響で崩れていくとき、農村の経済的自立も崩れていく。

その一つが、ラオスの織物である。世界でも例を見ないほど、洗練された魅力を持つラオスの織物は、村や家族で世代から世代へ伝えられてきた。ラオス人は、自分の民族や家の伝統を受け継ぐ織物にはプライドを持っている。しかし、特にヴィエンチャン周辺では、外国の商品に憧れるあまり、伝統的な織物文化を軽視する傾向がある。とくに若者は手間のかかる織物を織らなくなった。織物の技術がすたれていくと同時に、古い価値の高い織物はどんどん外国に流れていく。

ラオスの問題、特に農村社会の問題をトータルに

把握しようとするとき、すでに述べた経済、環境、文化の3つの要素を常に視野に入れておかなければならない。

東北タイで、複合農業経営による自給自足を柱とした村づくりをめざしているブーヤイパーイ村長は、若者によるイサーン文化の継承の大切さをいつも強調している。ある地域が経済的に自立していく運動の背景には、周囲の自然環境とそれに根ざした文化が精神的な支えとしてなくてはならないからである。

このラオスの文化の継承・保護という意味で、以前から考えていてまだ手がつけられないでいる計画がある。織物の保存館の建設である。今伝統的な織物文化が失われていくなかで、ラオス政府はなんの手立てもとっていない。既存の価値の高い織物を保存するとか、織物の流出を税関で厳しく管理するとか、マスメディアを使って人々に織物文化の再評価を促すとかの方法が考えられる。もちろん、技術の継承が大切なことは言うまでもない。

織物の保存館の建設は、たとえ小規模のものであれ、上記の方策の糸口としての波及効果は大きい。JVCは日本で何度かラオス織物展をやった。ラオスでもやりたいと考えている。そして近いうちには、織物保存館の建設にまでこぎつけたいと思っている。

JVCの方法 ― 農民同士の交流をめざす

近代化の門口に立つラオスでは、農民にとっても変化の始まりである。この変化が他の第三世界の農民がたどってきたものと同じものを意味するのか、あるいは農民による新しい村作りの曙光となるのかは農民の自覚しだいである。商品・貨幣経済の農村への浸透 ― すなわち多くの場合、農民自身の資源であった土地、森、労働力などが外部の者に買い取られていくことが、豊かさに向かっているのではなく、よりいっそうの貧困化を意味するということを、農民がいち早く気づいて対処するかどうにかかっている。

村人が現在の変化の意味を自覚するには、農民同士が広く交流するのが一番である。JVCの養成した生活改善普及員が入っている約60の村が、農民による村づくりと農民同士の交流の単位である。各地で行われている農業や母子保健のトレーニングを通して、タイやラオスの他の地域で試みられている適性技術が紹介される。そこで興味を持った農民をラオスの他の実践地域やタイに連れて行き、その目で成果と方法を確認させる。



伝統織物を継承する少女たち

このように、普及員が中心になって国内や国外の草の根ネットワークを広げていくことが、新しい変化に主体的に対処していく力のある農民を増やしていくことになる。普及員のスタディツアーは国内国外ともに回を重ねている。次のステップは農民自身のスタディツアーである。

ラオス人スタッフがJVCを背負う

JVCラオスが一番期待しているのは、JVCのラオス人スタッフである。男性スタッフのタノンシーはJVCに来て10カ月、もう一人女性スタッフのマニベットはまだ3カ月だが、すでにJVCラオスを背負っているほどである。彼らが来た当初から、私たちは彼らがラオスの開発の主人公として、どうこの仕事に携わっていくかと問うてきた。彼らは私たちが普及員や村人に接するより、ずっと自然に接するし信頼度も高い。村人や普及員の声にならない声にも敏感だし、私たちが伝えようとして伝えられない微妙な点もすんなりと伝えられる。

彼らは何回かのタイへのスタディツアーによっていくつものNGOに触れ、今ラオスでJVCがNGOとして何をしなければならないか、つかみ始めている。彼らは私たちが協力しているラオスの開発の主人公であると同時に、ラオスの将来と南北問題をもとに考える仲間である。そしてJVCの活動を通してNGOの意義と方法を自分のものにしていけば、自分たちでNGOを作るであろう。そうしたラオス人自身のNGOとJVCが協力しあうことが、一番望ましい活動のあり方だと思う。

ラオスチームのおしゃべり——— 難民って何だったの

北詰秋乃 さてっと、インドシナ問題について話さなきゃならないんだけど……。難民問題の行く末、各国内での対応の仕方、難民の帰還、そしてそういった状況のなかでのNGOの役割について。

私は以前、バナニコムに居て難民とつきあっていただけたけど、“難民”っていったい何なのかよく分からなかった。ラオスに来てからは余計わからなくなってしまった。というのも、メコン川の向こう側に見えるのはもう外国で、いとも簡単に国を出ることができる。さほど重要な理由がなくなると、向こう岸に行くなんてすぐだと思ってしまうんだけど。

タノンシー 難民が国を出て行ったのは、私たちが病気を治すのと同じ。病気になったら薬を飲むように、社会が自分に合わなかったらなんらかの治療をしなければならない。僕は昔、コミュニストの思想が大好きだった。本当に彼らの思想に賛同していたけれど、実際彼らの中に加わってみると、内部はだいぶ違っている。汚い部分もたくさん見えてきた。いろいろなことをがまんしても、何も得をしないということが分かってきた。第一食べていけない。

北詰 それでは、難民といわれる人の多くは、そういったやむなき理由で出ていったのかしら。そうでない人も多いと思うんだけど。

タノンシー 1975年から80年にかけては、ほとんど政治的な理由でやむなく国を出ていった。その後、外国へ行った親戚の話などを伝え聞いて行きたくなった人もたくさんいる。80～85年は政治的な理由とそうでない人は半々くらい。85年以降はほとんど経済難民といわれる人たち。

マリベット それに75～78年ごろには、タイ人がラオス人の出国を挑発したところがある。警察官なども金ほしさに、ラオス人を挑発して川を渡らせたりした。貧乏な人は難民にもなれなかった。

北詰 自分では外国に出ようと思わなかったの？

タノンシー それはもちろん思った。逃げようと思えばいつでも逃げることはできた。でも、僕は長く外国で暮らしていて(彼は8年間ブルガリアに留学していた)、自分が生まれ育った国以上に温かく感じるところはないと思った。その国の言葉を覚えても、友だちができて、やはり歴然とした違いを感じてしまう。それに僕は、たとえば日本みたいなカネ、カネの世界では耐えられないと思うから。

北詰 ところで、今ラオスに残っている人たちは、外

に出ていった人に対してどういう感情を抱いているのかしら。国を裏切った人みたいと思うのかしら。でもラオス人は、帰還難民の受け入れに対してもとても寛容で、どんな風に思っているのか興味があるんだけど。タノンシー 昔は帰還難民は、全員2～3カ月政治セミナー行きだった。いわば国を裏切った罪の償いという意味で。今はプロセッシングセンター(PC)に10日間居るだけ。UNHCRや外国の干渉などもあって大分変わってきた。

北詰 私は何度かPCへ行行ったことがあるけど、帰ってきた人たちの顔がずいぶん暗いのが印象に残りました。尋ねると、口では親戚や友達に再会できてうれしいと言うのだけれど、顔が笑っていない。

タノンシー 故郷に帰ってきた喜びは本物だと思う。ただ、望みを果たせなかったことへの失望と、果たせずに帰ってきてしまった恥ずかしさがあるのだろう。

北詰 最近になって、いよいよ第三国の受け入れを打ち切り、難民帰還という動きになっているのだけれど、近代化の波に迫られ変化をとげつつあるなかで、今ラオスの役割は何でしょう。あるいは、私たちNGOがやっていくことと言ったら何でしょう。国内にもまだまだ問題がたくさんあると思うんだけど。

マリベット 職がない。

北詰 そう。現在ラオスにいる人でも、特に若者は、機会があれば外国に行きたいと本気で考えている。

マリベット 仕事をしようとしてもする仕事がない。あったとしても、自分のしたいことはなかなかできない。勉強しようとしても勉強するところがない。

タノンシー たとえば外国で専門的な勉強をしてきたとしても、それを活かす機会がない。

北詰 ラオス政府としては、そういった問題を解決していくということ。それではNGOができることは何だろうか。

タノンシー 国が良くなるためには、まずお腹がいっぱいにならなくちゃダメだ。お腹がいっぱいになったら次は頭(知識)。そうすれば自然といろいろなことを考える余裕が出てくる。

北詰 すると、やはり基本的な生活向上が必要だということになるようですね。一つはお腹がいっぱいになること。それには職の機会があること、あるいはそれに必要な技術を身につけること。教育の機会があること。つまりJVCが今やろうとしていることそのものになるわけですね。

インドシナ難民における自発的本国帰還

自発的本国帰還

UNHCRは、難民問題に対する恒久的解決法として、①本国への自発的帰還、②一次庇護国での定住、③第三国への定住を進めている。難民が帰還できる状況では、①が最も望ましい解決方法だと見られている。しかし、それは簡単ではない。難民が本国から出るに至った恐怖や危険の原因がなくなるか、減少していることが前提となるからである。本国政府が帰還民の入国を認め、安全な帰還に向けて一次庇護国と協力することも必要となる。

自発的本国帰還を進めるにあたっては、帰還民一人一人の権利が特に重視されている。全ての帰還活動が、帰還民自身の自由な自発的意志に基づいて行われることが非常に重要となる。

自発的本国帰還が最終的に目指しているのは、難民を保護し、難民が安全に本国へ帰る権利を認め、本国でのコミュニティとのつながりを取り戻させることである。大規模な難民問題では、自発的本国帰還が唯一の恒久的解決法となるだろう。それにはもちろん、本国に必要な条件がそろえることが前提となる。①は、②③の方法につきものの障害もなく、大規模な難民問題の解決には好ましい。

自発的本国帰還プログラムは、難民に対する通常の緊急救援とは異なる。一定期間に多くの人が帰国するため、次のような活動が考えられる。

- a. 一時庇護国のキャンプで情報を流したり、一時滞在施設を準備したりする活動
- b. 本国への移動を準備する活動
- c. さらに国内での出身地への移送を含む本国での受け入れ活動
- d. 出身地での定着のための支援や、モニタリング（帰還民に対する迫害、差別がないかを調査）を行う活動

安全な帰還のためには、a～dの活動は一つも欠かせない。a～cは本国へ帰還するまでの準備を行うという性格を持つのに対し、dは本国での生活再建を支援するものである。地理的には、aとbが一次庇護国で、cとdは本国内で行われる。

タイからの自発的本国帰還

UNHCRは、インドシナ難民・避難民のタイからの自発的本国帰還を強く進めている。自発的本国帰還がまだ有効に実現されていないにもかかわらず、ラオス・ベトナム・カンボジア難民はいずれも自発的に本国に帰ることを希望していて、ここ何カ月かの間に希望者が増えている。

タイからの帰還のための準備は、規模や条件などがラオス・ベトナム・カンボジアそれぞれでかなり異なる。これは、それぞれの民族の特徴や歴史的・政治的社会的条件が異なるためである。帰還計画において三つのケースに特徴的な点を以下に見てみよう。



難民帰還に関して、タイ・ラオス・UNHCRが話し合う

ラオス人の自発的本国帰還

現在、ラオス人の自発的本国帰還が一番進展している。この計画は1980年にラオス・タイ両国政府とUNHCRの合意に基づいて始まった。しかし、当初は難民の間での関心も低く、進行状況はゆっくりだった。1988年、両国間の関係やラオス国内の状況がよくなってきたのに伴い、希望者が徐々に増え始めた。難民の間での関心の高まりに応じて、両国政府とUNHCRの三者間のミーティングが何度か開かれ、手続きをより簡素化して本国帰還する人を月に約300人まで増やすことが了解された。現在、希望者は数週間内に帰国できる。1980～88年に3403人、1989～90年に3174人が帰国した。そして、希望者数、特に山岳民族は増えている。

UNHCRは、キャンプ内では視聴覚教材を使って

ラオスの状況を見せ、積極的に帰還活動を進めている。帰還民に家財道具や米など物的援助を行い、ラオス国内では帰還民の多い地域で村単位の援助を行っている。これは、学校や診療所の建設、農産物の供給など地域住民と帰還難民と両方に役立つものである。

両国政府の関係は急速によくなっており、難民問題に是非とも取り組むべきところまでに達している。ラオス政府は、15年間に渡ったこの問題に終止符を打つため、UNHCRの協力を得てタイに残っているラオス難民全員を4～5年のうちに受け入れるという方針を最近示した。

ベトナム人の自発的本国帰還

インドシナ難民国際会議（1988年6月）で採択された「包括的行動計画」（CPA）によって、東南アジアの一次庇護国からのベトナム難民の自発的本国帰還の大枠が示された。自発的本国帰還は、1988年12月のベトナム政府とUNHCRの合意に基づいて始まった。その際、①帰還難民は非合法に出国したという理由でベトナム政府から罰を受けないこと、②出身の村や町に帰ること、③地方政府は、出国しなかったベトナム人と全く同様に帰還民を扱うこと、④UNHCRは物的援助を行い、生活再建の進み具合について調査をすること、が合意された。これまでに、タイからの353人を含む7000人がUNHCRの自発的本国帰還プログラムで帰国した。

今後、一次庇護国からベトナムへの帰還は、かなり長期間にわたることが予想される。ベトナムへのフライトに対する援助を除けば、生活再建の支援は

個々の帰還民に直接与えられるものだけになるだろう。この動きは、「合法出国計画」とは反対のものだがよく似ていて、「合法帰還計画」と呼べるようなものである。

カンボジア人の自発的本国帰還

カンボジア難民・避難民の本国帰還は、当然全ての関係各派による包括的平和解決へ向けての枠組みの中で考えられるべきものである。UNHCRは、すでに個々の自発的本国帰還を援助し、カンボジア国内での生活再建への支援を行っているが、タイ国境のカンボジア人（約30万人）の自発的本国帰還は、ラオス難民とベトナム難民の場合とは、規模・性格が相当異なることが予想される。対象となる人々や状況を考えると、かなり大規模に資金を用意し援助活動を行うことが必要となるだろう。このような援助は緊急援助に近いものとなり、一時的にかなり集中的に活動が行われることになる。この場合、あらゆる輸送手段を用い、基本的援助活動を行うことによって、安全かつ迅速な移動を行うことが必要になる。本国での生活再建への援助は広い範囲の活動に及ぶため、事前の準備計画・援助物資・インフラストラクチャーの整備などが必要となる。

帰還にあたっては、国際的な援助が行われていない地域での帰還民のニーズを満たすため、とりあえず生活再建に対する援助が行われる予定である。このような暫定処置は、政治解決に続く二国間および多国間の援助による開発・再建に引き継がれたら、引き上げられるべきである。

（訳・鈴木彰子）



タイからホーチミンに着いた
ベトナム帰還民

サンタの来ないエチオピア

—ふたたび干ばつが襲う—

コーディネーター 寿賀 一仁

1990年12月25日、日本では華やかなイルミネーションが街を彩っていたであろうクリスマスの日、我々JVCエチオピアチームは第3回食糧配給の真只中にあった。夜10時過ぎ、皆が昼間の疲れですでに眠りについていたら、部屋のドアを激しく叩く音に私はむりやり起こされた。ドアを開けた瞬間、胸元には銃が突きつけられていた。私を取り囲んだ兵士が口々に叫ぶ。「敵が攻めてきた」「JVCは軍に車を供出しろ」

彼らの声を聞きながら、私はそれまでの様々なシーンを思い出していた。配給所に集まってきた村の人々、栄養失調の子供たち、立ち枯れて全滅したソルガムが一面に広がる畑。そして先日カナダのNGOのスタッフと話したことを。

「今年はこの国にサンタがやって来るだろうか」

*

ゴジャム緊急食料援助終わる

1990年度のJVCエチオピアの主要活動であった東ゴジャム州ビチュナ県シャベルバランタ地区における緊急食糧援助は、冒頭に記したような治安上の問題による中断はあったものの、本年1月25日に最後の



立ち枯れたソルガム

食糧配給を終え無事第一段階を終了した。昨年6月のプロジェクト開始時からの食糧配給による受益者はのべ15万人、配給食糧は1500トンにのぼった。

また並行して行われた栄養失調児に対するケアの活動では、350人にのぼる極度の栄養失調児に対する月一回の検診、粉ミルクの配給、母親への衛生・栄養に関する基礎的な教育活動が現在も継続されている。さらにフード・フォー・ワークの活動（受益者の援助依存心を高めないために配給食糧に応じて地域の生活向上に役立つ仕事をしてもらう）として道路の補修、泉の清掃等が行われ、今後は泉の整備等衛生的な水の確保のための活動を本格化する予定である。

今回の緊急援助は早期の調査開始、カナダ・日本両国政府および国連の迅速な対応、そして何よりも緊急アピールに応じて下さった日本の支援者の方々の暖かいバックアップにより、大量の難民や餓死を未然に防ぎ、成功裡に終了することができた。この場を借りて支援して下さい皆様一人ひとりに感謝の意を表するとともに、以上の通り御報告いたします。

再び干ばつが

緊急救援活動が終了したといっても、決して問題が解決したわけではない。エチオピア全土を見渡してみると、北部および東南部を中心として2年連続の干ばつに襲われている。特にエリトリア州では収獲ゼロと国連の調査で報告されており、内戦という援助への障害も相まって、内戦時のピアフラの再現が噂されるほど危機的な状況となっている。昨年12月のWFP（世界食糧計画）のレポートによれば、今年もエチオピア全土で約600万人の人々が食糧援助を必要としており、約95万トンの援助が国際社会に要請されている。この状況は、JVCの活動地域である東ゴジャム州でも例外ではなく、青ナイル川沿い



ここにも栄養失調の子どもが

この食糧が人々の命を支えた



の低地では干ばつにより作物が全滅した村もあり、前途を悲観した農民が自殺するという悲劇まで発生してしまった。

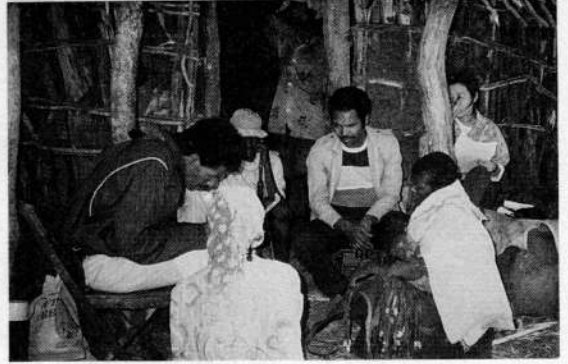
JVCとしては一部で緊急食糧援助を継続しつつ、力を落とした人々を励まして、ともに農村復興に取り組んでゆく考えである。食糧援助は一時しのぎの延命医療でしかなく、ネバー・エンディング・ウォーの中で人々の生命力がますます衰退してゆく危険性を孕んでいる。根本的な解決を図るには生態系の回復と人々の自立が唯一の処方箋である。この長い時間と粘り強い努力を必要とする道を我々は歩いてゆくつもりだ。「急がば回れ」の言葉にもある通り、息の長い支援こそが一番の近道だということを改めて強調しつつ、引き続きの御支援をお願いいたします。

湾岸戦争の影響

私がこの原稿を書いているのは2月上旬である。この時点において私は、飢餓や内戦といったエチオピアにおける根本的問題とは別に、もう一つ非常に重大な事実を指摘しておかねばならない。それはエチオピア、いやアフリカ全体に対する湾岸戦争の影響である。現時点における世界最大の問題としての湾岸戦争の重大性は明白である。しかし日本での報道はもっぱら戦闘そのものと、それをめぐる政治的駆け引きに終始している観がある。戦闘自体の重大性を決して否定するものではないが、センセーショナルな報道ラッシュの陰で、忘れ去られている戦争の犠牲者がいる事実を見落してはならない。

今アフリカでは、内戦・干ばつ・貧困などの理由により2000万人の人々が飢えに直面している。しかし湾岸戦争のため、彼らに対する援助は今まさに止まろうとしている。一つは高い戦争保険のため物資の輸送船が止まり、もう一つには石油供給の停止により輸送トラックが止まるという理由によって。彼

家庭訪問中のJVCスタッフ



らは確かに直接の戦争犠牲者ではない。が、明らかに湾岸戦争の犠牲者である。そしてその規模は比較にならない程大きい。さらに同じ様な犠牲者は世界中に存在する。

ソ連、東欧、アジア、中南米。世界大に広がった政治経済システムの中に生きる我々は、一つの地域紛争が世界大の力の介入によって発生し、その犠牲が世界大に発生するという事実を直視しなければならない。そして湾岸戦争による世界大での悲劇を避けるため、戦争の即時停止の声を、より一層強くあげてゆかねばならない。さらにこの世界大の犠牲を未然に防ぐため、彼らへの支援をより強く行っていかなければならない。

エチオピアではすでに石油価格が25倍にはね上がり、ここ2週間のうちに供給自体が完全にストップするといわれている。湾岸戦争が長期化し、終わってふと気付いた時に世界各地で何千万もの犠牲者が出ていたという最悪の事態が訪れないよう、我々はアフリカからアピールを発し続けるつもりだ。皆様からのよりいっそうの御支援をここにお願ひすると同時に、多国籍軍への支援ではなく飢えとの戦いを支援して下さいをお願いしたい。

*

軍への協力は何とか拒否したものの、結局翌26日JVCエチオピアはビチュナからアジスアベバへ緊急避難した。配給中断の無念さとマーシャの苦い思い出を抱えて。残念ながら今年、エチオピアにサンタクロースは来なかった・・・

幸いなことに今回はマーシャのような大事には至らず、1月なかばには活動を再開することができた。環境破壊、干ばつ、内戦と、人々をとり巻くすべての状況が極限にいたった感のあるエチオピア。

この地で人々と苦難をともにしながら、今年こそ皆でクリスマスを祝うことができるよう頑張っていると思っている。

サラワク・スタディーツアーを終えて

私たちが彼らの森を 取り上げてしまった

浅香 由美子

目を閉じると、マルディに向かう途中、セスナ機から見た光景が浮かんできます。緑の大地、その中を縦横に走る伐採道路、そして大きな穴が開いているかと思えば、それは木が伐採された跡でした。私には、森の「たすけてー」と叫ぶ声が聞こえたような気がしました。

子どもの頃、森には妖精が住んでいるという話を聞いたことがあります。森を守り、めぐみを与えてくれる妖精は、あの森の中にはいるのでしょうか。もしかすると、木が伐採されていくのを悲しんだ妖精たちの涙が、土砂といっしょに川に流れ込み、川には魚が住むことができなくなったのかもしれませんが。伐採が始まる5年ほど前には、川の水は飲み水として使えるほど澄んでいたなんて、とても信じられません。上空からみても、川の水は茶色く濁っているのがはっきりとわかります。明らかに水の色は、川の汚れが伐採と深い関係があることを証明しているのです。

ウマバワンの人々も、生活環境の急激な変化に戸惑いを感じたことでしょう。そして、仲の良かった村人たちが、伐採反対派、賛成派と真二つに分かれてしまいました。しかし村に滞在している間、一度も村人たちがいがみあっているような感じを受けませんでした。昔ほど仲が良くないという程度ではないかと思います。村人たちのほろかな表情からは争い事があるとは想像できません。日本では選挙などで村が真二つに割れてしまった場合醜い争いが繰り広げられ、陰湿な雰囲気の後々まで残ってしまうのに、土地柄なんのでしょうか。子どもたちも、そんなことはおかまいなく、自分の家も他人の家も自由に出入りしていました。もともと個人で所有するといった考え方がなく、村のみんなで共有するといった考え方を持っていたのでしょうか。それは森で暮らすには最適な方法なのかもしれません。

しかし、村にも貨幣経済の波が押寄せています。村で日本製品を見たときは、うんざりしました。森

を荒らして利益を稼ぐばかりではなく、電気製品などの品物を売り付け利益を上げ、知らぬ間に村人をコマーシャルイズムに巻込んでいるという現実を見て、呆然としました。豊かになったと言われる日本人の暮らしは、世界中の人々との物質的な交流によって支えられているということを改めて実感しました。ただ、この物質的交流とは日本企業の一方的な利益追求にすぎないのではないのでしょうか。45年前は日本軍が武力で東南アジアを支配し、そして現在、企業戦士が経済という武器で大東亜帝国を築こうとしているのではないかと、ふと考えてしまいます。日本とは、いったいどういう国なのかと疑問を抱かずにはいられません。

とにかく、精神的な交流をもっと行わない限り、サラワクに住む人々の首をもっと締め付けていく状況に落ち入って、最終的には自分の首を締め付けることになるのではという不安が、頭の中をよぎります。今、私にできることはサラワクの人々との深い関係を、身近な人々に伝えていくことだと思います。

大切なものというのは失ってから初めてわかるものなのですね。また、人によっては価値観の違いから、手遅れになって初めて気がつくということもあるでしょう。サラワクの先住民の人々は、手遅れになる前に立ち上がったのです。気づかぬうちに、私たちは彼らから森での平和な暮らしをとりあげてしまったのです。彼らと私たちが協力しない限り、熱帯林を守ることは不可能ではないのでしょうか。小さな活動が、やがて大きな力へとつながることを信じ、サラワクの人々の生活を、熱帯林の保護を支援していきたいです。

自分たちの生活を 見直さなければ

長谷川 まり

日本にいと熱帯木材はよく目にするし、いつの間にか出来上ってしまった日本の経済システムに乗かって、知らず知らずのうちに間接的に自分も使用している事に気づく。しかし、それと同時にマレーシア国内の先住民の土地所有権や開発、人種など

JVCでは10月26日から11月3日までサラワク・スタディツアーを行った。10月29日に、カヤン人の村ウマバワンでは「大量逮捕三周年大会」が催され、伐採反対のために逮捕された人たちの演説を聞いたり（マレー語でよくわからなかったが）、吹き矢大会などのイベントに参加した。今回のツアーには、浅香由美子、茅野ゆり、田中真澄、長谷川まり、内田洋一郎、由衛英樹、土居陸子、黒木晃の各氏と、JVCからは岩崎美佐子、柴田久寿子が参加した。



の問題の存在に、私は、むしろそちらの方にショックを受けた。土地所有権、政府、行政、森林破壊、人権、異常気象、経済システム、ODA などすべて切り離しては考えられないことばかりだ。

それに加えて気になったことがあった。今回は、ウマバワンという一つの村しか訪ねなかったが、村の人は、合成洗剤を使っている。川の水量に対して大した量ではないのかも知れないが、下水処理システムの無い所に合成洗剤がこれから普及していく可能性を考えるとどうしても気になる。

もう一つは、先住民の若い人たちが、村の中にいてすることがなくつまらないと言っていること。これは、世界中どこにも起こる現象だろう。いつの時代にも「昔は良かった」と言う年長者は必ず居るものだが、ウマバワンにおいても、彼らの中の高年令者と若者たちとの考え方の間に、なんとなくそんなものを感じた。村の品揃えを見れば、今見れば、今までの自給自足生活とは違う生活様式に、確実に移行していることがわかる。私は、暑さのあまりショップでジュースを買いながら、ふと、部族がいつか伝説の人になってしまう日と思った。

先住民の部族間同士の土地所有権は別として、対州政府の所有権を確立しなければ彼らの生活は守れないのだろうが、森の中を移動しながら自給自足していくことが政府の言う原始的な生き方で、それは、本当に近代化しなければいけないものなのだろうか。そして将来を担う先住民の若者は、本当のところいったい何を望んでいるのだろうかと思う。村にいたのが、たった5日だったので、正直なところ私には

残念ながらその辺のことがあまりよめなかった。

熱帯林を守るには、どうしたら良いのだろうか。伐採された木材の80%の行き先である日本は、これを使わない生活をしなければならない。しかし、各企業が熱帯木材を使わないとなれば、同じ営業を続ける以上代替品が必要となる。それは、新たな環境破壊や公害を生み出さない物でなければならないし、経費は採算の取れる範囲でなければならない。失業者を出すことなく、日本が熱帯林の輸入を削減するにはどうしたら良いのだろうか。法律、経済、生物、環境などの学問の知識のない私には、全くの素人考えしか出来ないが、人類が限りある資源に頼りきった生活をやめない限り、熱帯林は減っていくのではないだろうか。

こうしている間にもサラワクでは木が切られているし、先住民の生活が危機にさらされている。とりあえず、私たち日本社会に住む者は今の自分の生活を知り、考え直してみるべきだ。日本に限らず先進国といわれる国々と第三世界との間に、人権上力関係があることに、サラワクに行って以来私は怒りを感じている。

私は、今回短い時間ではあったがカヤンの人と接する機会を得、異質な文化を経験し、改めて自分の生活している社会を確認し、自分自身の再発見をした。私たち一行は、彼らと同じサロンを身にまわってみたけれど、どれぐらい彼らを理解できたのだろうかと思う。あちらから見れば少々滑稽だったことだろう。彼らのことを日本からも応援しつつ、自分もいろいろ悩んでみたい。

サラワクのジョクさんと日本

柴田 久寿子

ジョクさんの暮らし

ジョクさんは、マレーシア・サラワクで行われている熱帯林伐採に抗議しようと、日本で開かれるITTO（国際熱帯木材機関）の定例理事会に出て話をする事と、日本市民へサラワクの現状を知らせるためのキャンペーンを目的として11月14日から約10日間、日本へ来た。ジョクさんは熱帯林伐採に反対するサラワク住民会議の議長である。反対運動のために家のこと、農作業のことなどを奥さんや他の家族にカバーしてもらいながら、東奔西走している。伐採現場で木材の下敷きになって傷めた足のケガを治す暇もなく、いつも片足をひきずりながら歩いている。ジョクさんが日本に来たのは2回目だ。

前回来た時も今回も、日本の人に少しでもサラワクの現状を知ってもらおうという目的だったので、限られた時間を有効に使うために朝から晩まで、会議、シンポジウム、講演会とびっしりのスケジュールだった。

私は、ジョクさんが日本に来る10日ほど前まで、ジョクさんの住むウマバワン村にスタディーツアーに行き1週間ほど滞在していた。

ジョクさんたちウマバワンの人は、熱帯林から、木の実や果物、動物などの食料、日用品、薬草などを得、熱帯林とともに暮らしてきた。村のお年寄りの案内で一緒に森に入ったとき、村の人が木の葉を2〜3枚摘んであっという間に即席のコップやお皿を作って、「私たちは森に来る時、何も持ってこない。森には材料が全部揃ってるからね。それに使った後捨てても、また森に還っていくだろ」と自慢気に話してくれたのを思い出す。

湧き水で泳ぐ小魚を腰にぶらさげたナタで、一撃し、つかまえてくれた。小魚は頭からタテに真っぶたつに割れていた。

村での滞在は短かったが、朝はクラッカーかめん類にミロ、昼と夜はバナナの葉にくるんだ炊きたての御飯、わらびかキャッサバのいため物、トマトかなすびか判明しなかったが、ちょっぴり酢っぱいスープか少ししょっぱいゆばのスープ、今でもはっきり味や形を思い出すくらい毎回同じものばかり続

いた。でもおいしくて、いつもきれいに平らげた。食事ひとつとっても、ほとんどを熱帯林や自分たちの畑から獲れるものである。基本的にお店では買わない。熱帯林がスーパーマーケットなのである。

日本の家に換算すると12〜18畳分の部屋が三つから五つが一般的な家の造りで、家具はほとんど置いてない。そんな部屋に住む家族が長屋のように10数軒びっしり肩を並べている。

私たちお客さんに入れ替り立ち替り、あいさつに来る人々。誰と誰が夫婦なのか親子なのか、仲が良くてわからないほど、ゆるやかな人間関係。

熱帯林伐採の影響で、ジョクさんたちの生活は大きな影響を受けていたが、それでも私にはジョクさんたちの生活ぶりがうらやましかった。

ジョクさんは、一度村を離れて、プランテーションで働いたことがあり、町の生活も知っている。彼はウマバワン村での生活をどう思っているのだろう。町での生活をやめて、熱帯林伐採で揺れ動く村に戻ってきたジョクさん。日本に来て、限られた所だけ見てどう思っているのだろう。消費、浪費の物に溢れかえった日本ばかり見ているのだろうか。

日本にも土とともに生き、自然の声を聞こうとしている人たちがいることを見てほしいと思ったし、共通の問題点があれば連帯していく可能性もあるのではないかと思った。

三里塚へ行く

ジョクさんを、三里塚で有機農業をやっている小泉さんのところへ案内した。私は小泉さんのつくる野菜を定期的に購入している。援農にも2〜3回行ったことがあった。小泉さんの家から成田空港は目の前に見える。人、物、情報あらゆるものを乗せて巨大な飛行機が気ぜわしく発着している。

小泉さんの家は、有刺鉄線をはられた草ぼうぼうの荒れ地に囲まれ、地平線が見える他は何もなく、彼の家がポツンと建っている。そんな殺風景な景色の中に鉄骨でガッチリと組まれた2階建分くらいの高さの監視塔が目立つ。その監視塔には24時間、警察の人が望遠鏡からこちらの様子を伺っている。小泉さんは奥さんと子供3人の5人家族。どこの政治

団体にも属さず、ひとりの農民として生活の場で良心的に空港建設反対運動をやっている。

小泉さんは三里塚で生れ育ったわけではない。成田空港建設反対運動をやっているうちに、三里塚に住んでいた大木よねさんという女性の養子になって農業をやるようになった。

小泉さんの家は、お世辞にもきれいとはいえない。大きな家でもない。お風呂は五衛門風呂で、小泉さんがまきを割ってたきつける。トイレは薄暗い裸電球がぶらっと下って、足元をよく見ながら用を足す。スイッチひとつで沸くお風呂や、汚物の姿がすぐ見えなくなるトイレには縁がない。

畑でも農業は使わない。夏場の草取りはどんなに大変か、援農に行った後2～3日、筋肉痛がとれなかった時のことを思い出す。

巨大な力と機械が、三里塚という静かな土地を近代化の象徴のような空港に変えてしまった。どんなに頑張っても抗しきれなかった。大きな力によって。その中で小泉さんは、あえて、便利で快適な生活を拒否しているようだ。愛情をこめて耕し、育ててきた土地を空港建設で追われるかもしれないのに。

ジョクさんに、小泉さんの生き方や農業のやり方を見てもらおうと思った。

ジョクさんたちが大事にしてきた熱帯林も巨大な力と機械で壊されている。伐採の傷あとは大きく、これ以上熱帯林に生活の多くを依存し続けることはできない。現金も教育費、交通費、裁判闘争費等々、必要となる場面が増えている。

伐採会社で働くことはしたくない、かといって伐採地がプランテーション化され、そこで働くというのもいやだ。今までの生活を大事にし、現実的に生活するためには農業が一番だ。しかしジョクさんの頭の中に具体的なイメージはなく模索中だ。

小泉さんの畑には、人参、大根、八つ頭、中国野菜と冬の野菜がたくさんできていた。

「こんなに寒いのに、どうして野菜ができるんだ」と感心しながら、ジョクさんは野菜の写真ばかり撮っていた。「この野菜はサラワクでもできるか、種は手に入るか」ジョクさんが小泉さんに向ける質問は伐採反対運動とともに、現実には、ではどうやって生活していくか、新しい生活を一生懸命模索している厳しさがこもっている。

機械化は成功のしるし？

小泉さんの友人の小川さんの所も訪ねた。小川家



小泉さんを訪ねたジョクさん(左から二人目)

の納屋にはトラクターが一台置いてあった。ジョクさんはトラクターを見つけると、不自由な足をひきずりながら、一目散にトラクターに駆け寄った。そして、ひとつひとつの部品をそっと触りためつすがめつ眺めながら、座席に座って「これはいい。日本は機械があるから発展したんだ」と嘆息まじりに言った。

小泉さんの生活スタイルは、便利で快適だと思っている私の生活にない、物や自然に対する知恵や愛情を思い起こさせてくれる。ジョクさんの村を訪ねた時も同じ思いにとらわれた。だからジョクさんは、小泉さんの生活ぶりに共鳴してくれると思ったし、改めて自分たちの生活のすばらしさを認識してくれると思った。

しかしそれは私の勝手な思い込みのようであった。ジョクさんの頭の中には、伐採が止まり荒れたとはいえ、生活のさまざまな資源をまだ提供してくれる熱帯林と、機械化により近代化された村の生活が共存してるらしい。

機械を入れることにより、燃料費、維持費と経費はかかっていくだろう。機械購入そのものが、ジョクさんたちの生活レベルからいって大きな負担を強いることは想像にかたくない。そうやって貨幣経済に巻き込まれ借金地獄に陥っていくパターンは、アジアのあらゆる所で見てきた。日本の農家も似たりよったりだ。そうなる前に堅実な現金収入を得、自分たちの生活の良さを再認識する道は開けないのか。

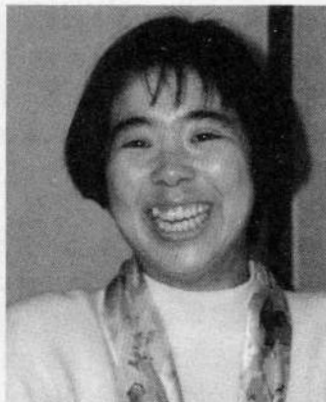
ジョクさんが自分の村をどんな村にしたいのか、伐採反対運動と並行して、これから考えていかなければならない。

ジョクさんと過ごした1日は、空港建設反対運動をしながら近代化を拒否する小泉さんと、伐採反対運動をしながら近代化にあこがれるジョクさんを目の前にして、私自身がどんな生活を目指すのかを考え、実行していくことなのか、考えさせられる時間であった。



JVCに若い女性パワー2人

最後のパナニコム・スタッフ——鈴木彰子さん



鈴木彰子さん

鈴木さんは、2月下旬にタイのパナニコム・キャンプへ日本語教師として向かいます。JVCとしては同キャンプの最後のスタッフとなります。

鈴木さんは、大学を出てコンピュータ関係の会社に就職しましたが、毎日の生活に疑問を持ち、自分の生きるべき別の場所、または別のライフスタイルを探そうと、精神的に動き始めました。青年海外協力隊に応募したり、いろいろなNGOを訪ねて回ったりもしました。昨年11月に会社を辞めてからは、千葉県三好村で、有機自然農法の実習も受けました。

そんな鈴木さんとパナニコムの関わりは、昨年夏から。鉄条網に囲まれた閉鎖的な中で、働かないで他者に自分の状況を任せるようなシステムの下での人々の心理はどうか？ この問題意識が今回の派遣につながっています。

「自分は難民とボランティアという関係ではなく、人間同士として、お互いがどういう人間なのかを確かめ合うことから始めていきたい」と抱負を語ってくれた鈴木さん。その前向きさとバイタリティーでがんばれ！

夫とともにハイフォンへ——稲見由美子さん



稲見由美子さん

今年1月にめでたくJVC内結婚された由美子さんは、夫の圭さんが昨年からスタッフとして頑張っている、ベトナム・ハイフォン市の職業訓練センターへ、会計担当として3月上旬に向かいます。

由美子さんがJVCに関わるようになったキッカケは、圭さんに誘われて一昨年の東京グリーンウォークに参加したことから。そこで出会った人たちは、自分個人の生活だけでなく、JVCに協力することによって広く外を見て、自分の内を見つめ直していた。その体験がとても新鮮で、その後もJVC東京事務所のボランティアをしながら、自分で何ができるかを模索し続けてきたわけです。

現場では、仕事と結婚生活の兼ね合いをうまくし、そこで必要とされていること、自分にできることを積極的に考えていくつもりです。家政学が専門で、唯一の女性スタッフの由美子さんですから、きっと自分にしか見えない視点が出て来るはずですよ。がんばってください。

(大満邦彦)

この人に聞く

ベトナムを支援して20年

新石正弘さん

昨年の12月とこの1月、ベトナムに向けてハイエースのミニバスとランドクルーザーが船出した。ミニバスは耳の聞こえない子どもたちの学校、ヒーボンスクールのスクールバスに、ランドクルーザーはハイフォンのJVCでそれぞれ使われる。輸送手続きをやったのは新石正弘さん。ベトナムに関わってもう20年になる。

1969年、学園紛争の嵐が吹き荒れていたころ、新石さんはベトナム反戦運動の真っ只中にいた。当時ベトナムからの留学生数百人が日本にいて、反戦活動をする留学生の一部が南ベトナムのパスポートを拒否したため、日本政府が在留許可を出さず強制送還される可能性が出てきた。そこで新石さんはベトナム留学生支援の会の結成に参加し、それ以来ずっとベトナムとつきあうことになる。

この会は75年にベトナム戦争が終わり、77年に初めて留学生が帰国した時点で解散となった。しかし統一したベトナムの経済再建はなかなか進まないため、留学生が帰国しても働き口はなく、多くのものは留学先にとどまった。日本にいる留学生のなかからも独自で会社を作るものが出てきた。

そんなひとりに頼まれて新石さんは7年間努めていたアジア学生文化協会をやめ、貿易会社を手伝うことになった。そこが2～3年で軌道に乗ると、次に頼まれたのが昨年から新石さんが社長をして

いるメコン通商である。この会社はもとの留学生と、ベトナム人と結婚して30年間ベトナムで暮らした日本女性と、新石さんが作ったものである。

「メコン通商を作って8年になるし、まあつぶれずにここまできて、もういいかなあと思っているんですよ」

新石さんは商売をすることが性に合わないらしい。どうすることが向こうの人のためになるのかを考え、経済建設を手伝う目的で作った会社だったが、「果たして近代化、工業化がいいことなのか思案中なのです」

今、ベトナムやカンボジアはODAの再開を見込んで日本の商社が待機している。特にベトナムは人口も多く魅力のある市場に違いない。しかし、カンボジアで働くNGOが危惧しているように、ベトナムも西側先進国の経済進出によって、貧富の差が広がったり、環境破壊が進むことは明らかだ。

とはいっても、今もベトナムには圧倒的に物が不足していて、人々の仕事がない。あれこれ考えると新石さんはどうも元氣になれないのである。

「商売だから何でもやらなければならなかったけれど、農業と味の素はやらなかった。それだけは良かったかな」

味の素をはじめとする化学調味料はベトナムの人々の食事によく使われるものだ。一度新石さんは、



「化学調味料は体に良くないから、輸入するのはやめた方がいいのではないか」とベトナムの指導者の一人に言ったことがある。すると彼は、「貧しくて肉や魚が買えない人が、料理をおいしくするために少しばかり入れることがないといけないのか」と言ったという。また社内ではこんな声も聞かれた。

「自分たちがやらなくても誰かがやる。それなら適正価格で商売し、その利益還元の方法を考えた方がいいのではないか」

しかし結局、化学調味料は取り扱わなかった。新石さんは言う。「“味の素論争”は、かなり難しい問題だったんですよ」

「ベトナムがどのように発展していくのかがいいのか、正直言ってよくわかりません。ベトナム政府側は、近代化や工業化をめざすことしか考えていないようですし」

今、新石さんはヒーボンスクールに定期的にお米を送っている。JVCのプログラムにも物資供給の仕事を手伝ったり、これまで培ってきたベトナム関係のネットワークを紹介している。今までと違った形でベトナムのためになにかできないかと考えているのだ。

「春。子どもの記念日寄金」始まる

キャンペーンの始まりは「井戸端会議」

「ね、この週刊誌の記事見て。七五三のお祝いのために、わざわざ羽織り袴を作ったんだって」

「へー。お金、あるんだ」

「あなたのうちも、豪華にやったの？」

「まさか！ 上の息子のときは、貰いもののダブルの背広で、近所にお宮参りをしたけど、今年七五三の下の子は、寝る前に同じ背広を着せて、部屋のなかで写真を撮っただけよ」

「あんまりじゃあない？ 七五三というのは子どもが病気の多い、弱い時期を乗り越えられたことを、神様に感謝するという意味もあるんじゃない？」

「そうだったわね。そういえば、このあいだJVCの谷山さんが言っていたんだけど、ラオスの農村部では、5歳までに10人のうち4人が死ぬんだって」

「本当？」

「ええ。ほら、ラオスでは母子保健活動をしているでしょう？ JVCが支援している生活改善普及員の学校を修了したラオス女性が農村で調査したら、条件が悪いところだけど、104人中42人とか、40人中17人も亡くなった村があるんですって」

「深刻ね。なんとかできないのかしら？」

「それがね、現場の普及員たちは、井戸があればかなりよくなるって、言ってるらしいの」

「井戸ねえ。大変なんでしょう？」

「そうでもないみたい。1本10万円で掘れて、1本あれば1つの村が潤うんだって」

「ふーん。あなたのうちは七五三ケチってお金が多少浮いたんだから、少し寄付したら」

多少、違うかも知れませんが、だいたいこんな感じで、今回のラオスのキャンペーン、「春。子どもの記念日寄金」は始まりました。

ラオスの子ども死亡は戦前の日本並み

井戸端会議で話題になった、ラオスの現実はどうでしょう。国連機関の統計によりますと、現在のラオスで、20%弱の子どもが5歳未満で死亡します。この数字を日本に当てはめると、昭和初期の数字と一致します。つまり、現在60歳前後の方が生まれたころは、5人兄弟の1人は死んでいたということで

す。幸い、日本では生活が改善し、医療などが発達したために、現在では乳幼児の死亡率は0.5%程度になりました。

ラオスの貧しい農村部では、この20%弱という数字より、もっと厳しい状態であることが、普及員の調査から分かりました。以下がその結果です。

村の名前	所帯数	出生数	死亡数
バウンカウナ村	6	35	13
ダンニューア村	5	44	14
マハザイタイ村	10	104	42
ラオウ村	6	40	17
サコッケン村	10	41	4
ナムファ村	7	45	17
ソンコンカオ村	9	35	8
ファンサヴァング村	10	50	4
計	63	394	115

(約29%)

貧しくて死亡率が高い村ほど、多くの子どもを生まなければならない悲しさが分かります。

井戸があれば、何が変わるのか？

「手を洗う習慣を付けたいのに、泥だらけの手を洗う水がない。伝染性の病気で子どもが死んでいく、井戸があれば病気は減るはずなのに……。栄養改善のために家庭菜園をすすめたいけれど、乾期には水がなくなって枯れてしまう。それに、お母さんたちが、水汲みの重労働から解放されたら、もっと子どもたちの面倒が見られるのに……」

これは普及員の生の声です。JVCにはタイで学んだ簡易井戸掘りの技術がありました。村民の協力があれば、10万円で井戸が一本掘れます。昨年来、何本かの井戸を掘りました。その多くが水脈に当たり村人や普及員の歓呼の声に迎えられています。

「私たちの力で、もっと井戸を掘りたい」という沸き上がる強い願いに応え、JVCラオスでは、特に貧しい村を選んで、井戸掘りに協力したいと思うのですが、お金が足りなくてこまっていました。

このラオスの願いと、井戸端会議に発した日本の思いを結びつけたのが、今回の「春。子どもの記念日寄金」なのです(寄せられた資金がすべて井戸掘

りに使われるわけではありません。普及員の養成や普及員の活動資金などにも当てられるはずです。

このキャンペーンは、3月のひなまつりから5月の子どもの日にかけて行われます。

私たちの子どものための寄金でもあるのです

このキャンペーン前のラオスチームの話し合いでは、次の点でみんなの意見が一致しました。それは「この寄金が私たちの子どものためでもある」ということです。これには二つの側面があります。

そのひとつは、少しでもよい地球を残そう、ということです。現在、地球環境の破壊が大きな問題になっています。それには、私たち北の国の人間の資源の浪費など、さまざまな理由があるでしょう。しかし、南の国の人たちの貧しさも、その原因の一つです。つまり、南の貧しさが北の国々の経済進出による森林伐採を促してしまうのです。ですから、ラオスの人たちの生活改善に協力することは、地球の環境を保護するという意味もあるのです。

もう一つは、子どもの情操教育の側面です。子どもを持ったときに、まず考えることは、最初にもあったように、健康であれ、ということです。そしてその次は、やさしい子どもに育て欲しい、だろうと思います。しかし、現在の日本の社会では子どもの将来を不安に思うのが正直なところでしょう。

どうしたら、やさしい心が育つか？ 一番いいのは、小さなときから折りに触れ、親と子がやさしい体験を積み重ねていくことではないでしょうか？ たとえば、雛祭り、子どもの日、卒業式、入学式、誕生日、七五三……、そういった子どもの記念日に、自分のことだけを考えるのではなく、今この地球で苦しいなかを、頑張っている同世代の人のことに思いを馳せる、そういう経験が、やさしい気持ちを育てると信じたいのです。

あなたに何をしてほしいのか？

最初は、あなた自身が自分の子どもの記念日に、ラオスなど南の国の子どもたちの現状を話してください。そしてできたら、子どもと親の気持ちとしてぜひ寄金を。もちろん金額はいくらでも結構です。ただ、こんな意見もあったことを紹介します。

「余裕があるから、余ったから、というのではなくて、苦しいなかだけど、というのが本当のやさしさだろう？ だから、子どもが欲しいと思っているもの、たとえばファミコンソフトの値段ぐらいがい

いんじゃないかなあ？」

次に、こんな考えがあることを、隣の方にしてみてください。そして、もっとできるならば、近くの幼稚園とか、保育園で集団でできないかもちかけてみてください。あるいは不特定多数の人に呼びかけてください。そのような動きが、すでに仙台、東京武蔵野、新潟、徳島などで広がろうとしています。



小冊子などにあふれる梶野さんのイラストです。

少しでも、多くの方に知ってほしいと、このキャンペーンにあたるラオスチームは、次のようなものを用意しました。

- 呼び掛け文 (B4用紙裏表)
今回のキャンペーンの趣旨などが分かりやすく説明してあります。
- 小冊子 (B5用紙12ページ)
いきいきとしたイラスト物語や“ラオスここが大好き”など楽しくてためになる記事が満載。
- 写真パネル (A3サイズ12枚組み)
美しい自然のなかに子どもたちの姿が一杯。幼稚園、喫茶店、小ホールで展示してください。
- スライド紙芝居 (40枚セット)
親と子の対話テープが、日本の子どもと比較しながらラオスの子どもの現状をやさしく説明。
- 講演
ある程度の人数が集まれば、上記のものなどを持って、ラオスチームの一員が参上します。
このほかにも音楽イベントなども考えています。
お問い合わせ、ご相談はJVC東京事務所の谷山、岩間までどうぞ。またお金を送りいただく場合は、「子どもの記念日寄金」と明記ください。
郵便局の振込番号は、東京9-27495、加入者名はJVC東京事務所です。



薬漬けのコショウ

インドネシアのカリマンタンでコショウを栽培している農民の話聞いた。コショウは好日性、日陰では育たない。したがって、もとは熱帯雨林だった土地の木をすっかり焼き払って栽培するのだが、コショウ畑の中に、乾燥地の好きなアランアランがすぐ生えてしまう。アランアランの日本名はチガヤ、砂漠化の一手手前の不毛の土地に生えてくる。アランアランは日陰を作るだけでなく、浅くしか根を張れないコショウの養分もすっかりとってしまうので、なんとしても除草する必要がある。

家族で1日に除草できる面積は、がんばってもせいぜい10メートル×20メートルぐらい。これでは、たとえば1ヘクタールのコショウ畑をもっている家族は、他の労働をいっさいしないで除草だけしていったとして、畑の草を取りきるのに50日を費やすことになる。最後の一角を取り終えて振り向けば、後ろはすでに草ぼうぼう。そこで、ヘクタールあたり1万円もする高価な除草剤を月1回は散布する。もちろん化学肥料、農薬もたっぷり使わないと、高く売れる粒がそろったコショウはできないそうだ。

ホルモン・キュウリ

山下惣一氏の『タマネギ畑で涙して』の中に、タイのチェンマイ県で栽培されている日本向けのキュウリに、毎日ホルモン剤と称するものを散布している農民の話が載っている。ホルモン剤のほかにも、殺虫剤、殺菌剤といわれているものも定期的に撒く。会社から、必ず毎日散布するようにといわれているホルモン剤の容器のラベルははがしてあり、農民にはそれが本当は何なのか、意図的に知らされないようになっている。そのキュウリを、農民は「ホルモンをかけて急成長させる気持ち悪いキュウリ」と言ってお口にしなそう。

タイのブリラム県、サクーン村のパイ村長からも

似たような話を聞いたことがある。東北部では、会社の下請けで日本向けのメロン栽培をする農家が増えている。しかし、あんまり農薬をたくさん使うので、タイ人は気持ち悪がってそのメロンを全然食べないということだ。パイ村長は「友人として忠告するけど、日本人もあんな農薬漬けのメロンは食べない方がいい」と言っていた。

農薬にしろ、薬にしろ、説明なしにいきなり「もの」が入ってくるのが第三世界の悲しいところだ。それまでは、その特性を熟知し、出所もわかっている「もの」で構成されていた生活に、得体のしれない工業製品はずけずけと入り込む。

農薬の恐しさを農民は知らない

マレーシアのサラワクに行ったとき、河口から快速船で8時間以上のぼった小さな町の雑貨屋の店先で、「パラコート」1リットル入りのポリ容器が並んでいるのを見た。あまりにも無造作で、一滴口にすれば命がなくなる劇薬とは思えないほどだった。

チェンマイ盆地に行ったときは、マスクもせず、裸足で大豆に農薬を散布する農民をあちこちで見かけた。農薬の容器にドクロ・マークがついていて、一応危険とは書いてあるものの、どう危険か、どう装備して散布するかなど詳しくは書かれていない。

農業開発と称して裏作が紹介されたものの、収奪するばかりなので土地は痩せ、それを補うために化学肥料や農薬を買うので出費が増え、生産品の価格の暴落や虫害で借金だけ増えていく。つまり、1年に1度お米だけ作れば食べられたのに、大豆もタマネギもと1年中働いて、仕事はきつくなったのに借金ができてしまったというのが現状だ。その「忙しい農業」はほとんどが輸出向けの商品作物栽培によってもたらされたもので、伝統的な農業の延長線上にあるものではない。

(岩崎 美佐子)

JVCプロジェクト

1991年1月25日現在

活動地名	活動内容	支援団体	担当者
東京本部	渉外, 事業計画, 資金調達, ボランティア調整, 会計, 総務, 情報収集および広報等。 機関誌「トライアル・アンド・エラー」発行。 JVC説明会 毎月第1月曜日 午後6時～8時 毎月第2, 4土曜日 午後2時～4時	全国社会福祉協議会	岩崎駿介 (代表) 林 達雄 (事務局長) 熊岡路矢, 星野昌子, 前川昌代, 山口誠史, 鈴木由子, 今泉 恵, 富安光子, 富安庸太郎, 柴田久寿子, 高梨直樹, 岩間邦夫
神奈川県	神奈川県内での渉外, 事業計画, 資金調達等を行う。 1月19日, タイから帰国した大石道子の報告会を開いた。 2月17日のカンボジア支援バザー, 2月24日のエチオピア報告会の準備を進めている。		清水俊弘
日本国内	●定住難民プロジェクト 1月20日, JVCタイ・スタディーツアー (定住難民の過ごしてきた過程を知る旅) に参加する7人が顔合わせ会を行った。ツアー期間は2月9日～15日。 1月24日, 第13回ボランティア団体, センター職員懇談会が大和定住促進センターで行われた。主な議題は「ブイ・ムウン事件公判経過について」「75期修了生ニエン・サムさんの自殺事件について」。	ジャパン・タイムス, 神奈川県福祉部, 禅林寺龍華会基金, ケアハウスさくら苑, 明るい社会づくり運動神奈川県協議会	小野豪大, 他約60人
環境 タイ (チャイヤブーン県)	●植林 12カ所で40世帯の農家が, 農薬, 化学肥料を使わない野菜作りを始めた。共同出荷も順調。 ●国際会議の開催 ラオスからの参加者は決定。 ●調査・研究 東南アジアの森林破壊, 商品作物栽培の影響などを調査中。	国際開発高等教育機構(FASID) 庭野平和財団, 日本住宅協会, YOKE	岩崎美佐子, Komain Soongsumalaya, Kasemsan Sriwatana Chukiat Katchamattya, Prasit Ingo, Chalaem Kaewchoho
エチオピア (東ゴジャム州) ビチェナ	●ビチェナ緊急救援活動 東ゴジャム州青ナイル川沿いの, 干ばつ被災地における緊急食糧配給は, 1月25日をもって終了した。この食糧配給により, 44カ村, 7万7,000人の人々が干ばつによる飢えをまぬかれた。この間の受益者はのべ14万人, 配給食糧は1,450トンにのぼった。また配給食糧に対するフード・フォー・ワーク (労働などの代価を食糧で渡す) の活動として, 道路補修, 泉の保護, ため池掘りなどを行った。 現在は今回の緊急援助活動に対する評価レポート作成とともに, 栄養失調児に対する保健栄養指導, および衛生的な水の供給のための泉の保護, 補修を継続して行っている。 ●農村の総合的復興促進 91年5月の段階で, 復興計画再開の地域を決定する。	CRDA, WFP, 犬養道子・みどり一本運動, モラロジーMIRC, 東京グリーン・ウォーク, 西本願寺, Tree for lifeの会, 中部善意銀行, 毎日新聞社会文化事業団, JVCカレンダー, メサイアコンサート, エチオピア救援バザー	山田 盛, 江原浩昭, 江原広美, 田尻真由美, 寿賀一仁, Solomon, Shikur, Ali, Tekleyohannes, Yodit

活動地名	活動内容	支援団体	担当者
ベトナム ホーチミン市 ハイフォン市	●地域総合復興（南部） ひきつづき第8区・ビンチャン郡において、障害をもつ子どもたちの訓練校、エビ冷凍工場で働く子どもたちのための夜間補習、識字学級、病院／産院、職業訓練施設などへの設備改善支援を行っている。 ヒーボンスクールにミニバスが到着、フォンフー小中学校はさらに5教室の新・改築を行っている。 なお、新ベトナム事業担当の柴田久史(2月4日から)と、JVC代表の岩崎駿介がこの3月、当地を訪れる予定。 ●帰還難民のための職業訓練（北部） 第1回の電気クラス(34名)が4月に8カ月の訓練期間を終える。第1回の洋裁クラス(30名)が12月13日から3カ月の期間で始まった。 自動車、バイク修理及び木工のクラスは4月開講をめざして、ワークショップの建設、機材の購入等を進めている。	(南) 庭野平和財団 立正佼成会 (北) UNHCR	熊岡路矢, 中野周二, 稲見圭, 稲見由美子, (南) Dinh Khac Mien (Paccomm) Cai Bich Thuan (第8区) Le Thanh Hai (住宅土地建設利用局) (北) ハイフォン市 Nguyen Luong Trao Dao Cong Hai Nguyen Van Long
カンボジア プノンペン市 カンボット県 カンダール県	●サンタビエップ技術学校 / ワークショップ 車両による国内輸送が復興のために果たす役割を重視し、①ワークショップ(修理工場)の設立 ②自動車の部品等の供給 ③自動車整備士の養成を初期の目標として、1986年にこの事業を開始した。JVCは現地実施機関の運輸省自動車輸送公社と人材面、技術・理論面で協力し、第一期、第二期と訓練を行ってきた。輸送公社には現在100台余りの日本製トラックがあり、JVCが部品を供給し、現地の自動車整備士が修理、メンテナンスに当たっている。 ●RINE(ライン)プログラム(母子保健活動) 母親教室、危険な妊娠の発見と早期移送、分娩等に携わる助産婦の訓練や医療器具・医薬品の供給などを行う“母子保健”と、小児発育検診や検診で表出された栄養失調児のケアを行う“小児保健”活動を行っている。 ●井戸掘り・給水 1990年から農業省水利局とOXFAM・LWS・JVCとの共同事業になったこの活動は、年内に90本の井戸を掘る計画でスタートした。しかし、内戦や、ソ連・東欧の援助撤退の影響で、現在活動は停滞している。通常の計画に沿った井戸と、国内の避難民キャンプに掘った井戸を合わせ、現在36本が掘られた。	創価学会青年平和会議、モラロジーMIRC、立正佼成会、日産労連、西本願寺善興寺ダーナ基金、高岡寺族青年会、毎日新聞大阪社会事業団、明るい社会づくり運動神奈川県協議会、浄土宗東京教区青年会、国際保健協力市民の会(SHARE)、四日市商業高校、JVCカレンダー、全日本仏教青年会、カリタス・ジャパン、真如苑、メサイアコンサート	古西勇, 馬清, 杉江美子, 本橋栄, 「現地の実施・調整機関と 主な担当者」 (運輸省) 国際局 Meas Semeth 自動車輸送公社 Thach Cang (保健省・母子保健局) Ann Sarun医師 保健委員会 Nhim Nhem医師 プノンペン郡 保健事務所 Sam Sarung医師 母子保健活動 Tui Kath Mat Samon (農業省水利局) The Iv Khim 井戸掘り活動 Hok Setha So Sarin
ラオス ヱエンチャン県 ボーリー・カムサイ県 カンムアン県	●生活改善普及員養成プロジェクト 保健衛生、農業、教育など生活全般の改善に携わる女性の生活改善普及員を養成すると同時に、普及員の地域開発活動を支援している。 現在各県で普及員による村人を対象にしたトレーニングが、JVCの建設した3カ所の母子センターを中心に行われている。カンムアン県ではタイのNGOのATAの協力のもと、普及員と村人を対象に井戸掘りトレーニングを1週間にわたって実施した。	UNDP, UNIFEM, 庭野平和財団, NVC,日産労連 ギャラリーイカ ット, 聖ヨゼフ 老人ホーム, 難 民と地球の緑を 考える会, グル ープ・カンガル ー, メサイアコ ンサート	谷山博史, 北詰秋乃, 原田恵津子, Thanongsi Solankum Maliphet Sukkhasume (ラオス女性同盟) Khamone Phetdao- heuan, Khamphone Saigna- vong JOCV, JVC カレンダー

活動地名	活動内容	支援団体	担当者
タイ バンコク事務所	①総務、会計、資金調達 ②各機関（国連、タイ政府、日本大使館、各国民間援助団体）及び東京事務所、ラオス・カンボジア・ベトナムを含む、各プロジェクトとの連絡調整 ③情報収集、広報活動、④在タイ日本人との連絡調整 ●奨学金プロジェクト 1月2日から21日までチャイャブーン、ブリラム県で再調査、小学校の先生、役人、村人、子どもたちと話し合った。3つの地域（学校）で奨学金・農業や課外活動を通した子どもの能力開発プログラムで行う予定。2月も再々調査のため、農村に入る。 他に奨学金小冊子の作成に取り組んでいる。 ●クロントイ図書館 1月12日の子どもの日、地区住民委員会や近くの幼稚園と協力して、500～600人の子供たちと歌や踊りなどで楽しい1日を過ごした。 クロントイスラムでは昨年3月ごろから、青少年の間でシンナー遊びがファッションのように大流行してしまった。彼らの多くは少年刑務所に入り、この2月には出所してくる予定。現在でも100人ほど（1-2-3区のみで）の子どもたちがシンナーをやっている。	全国社会福祉協議会 メサイアコンサート Tree for lifeの会、雄勝町町内寺院会、国際ソロプチミスト駿河、からし種モラロジーMIRC、	Pornpimol Chaiboon, Kamol Mingmuang, Manas Torkan Suntaree Lawsuan, 池島千津子、主婦ボランティア15名 Samruay Jongyorklang
カオイダン （カンボジア 難民キャンプ）	●西崎憲司記念技術学校 今年度の第1学期が1月7日にスタートし、461名の生徒を受け入れた。また OHFOM（欧米のNGO）の経営する伝統医療センター内に分校を設置、軽度の障害者を対象に漁網、竹細工のコースを開いた。先生3名を派遣し、20名の生徒が就学した。ドライビングコースは教員養成を継続中。車両の到着が待たれる。 難民の東北タイ農村へのスタディーツアーをCOERR（タイのNGO）と共同で進めている。	UNHCR, SV (Stichting Vluchteling)	Somyot Rattanatham Sutthi Netprakhon, 井本勝幸、井本美奈、
パナニコム （第三国定住待ち キャンプ）	●日本語学校 1月7日より子どもクラスをスタートした。現在5歳～13歳の25名の子どもたちが、日本語、算数の学習、レクリエーション活動に参加している。クラスは毎週月曜日から木曜日の午後に行っている。	IOM	竹村雅義、熊沢ゆり、 岡村達司、蘭牟田浩美、 Chowarite, Duangprom
ブリラム県	●農村開発 農民の意識調査を行った。パイ村長のグループにならない、とうがらし等の栽培を始める。	モラロジーMIRC, JOFIC, JVC カレンダー	Thongkham Sumruengram,

JVCの活動とその目的に御理解を

▶ **JVCとは**—Japan International Volunteer Centerは1980年2月、タイのバンコクで設立された民間救援団体です。1979年暮れの、インドシナ難民の大量流出をきっかけに、日本から駆けつけた若者と、現地タイですでに活動を始めていた日本人とが一体となり、現在の組織の原形ができました。JVCは、活動者の自発的な意志に基づき、日本の個人・団体からの寄付金、国連機関からの委託金等によって運営されています。JVCは、人種、国籍、習慣、宗教その他の信条の違いを越えて、難民および同様の窮境にある人々を対象にできる限り継続的な活動を行います。

▶ **JVCの会員募集について**—会員は、総会に出席し、JVCの方針などを決定する他、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・上映会・学習会等へ参加することができます。会員の種別と年会費は以下の通りです。また会費には機関誌の購読料が含まれています。

・正会員 (一般会員 10,000円 活動者会員 3,000円
団体会員 30,000円 学生会員 3,000円)

▶ **機関誌『Trial & Error』のみの購読について**

・毎号1冊送付 年間購読料 3,000円

・毎号4冊送付 年間購読料 10,000円

▶ **送金の方法**—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。

①会員：東京5-48365 加入者名—JVC会員係

②T/E：東京3-54186 加入者名—JVC東京事務所
(住所、氏名、購読開始月をお書き添下さい)

▶ **みなさまの募金を支えるJVCの活動**—救援活動をより充実させるため、以下の募金をお願いしています。なお募金の20%をJVCの運営経費に充当させていただいています。

A. アフリカ難民募金 (2月小計 529,028円)

アフリカの難民・飢餓民への救援プロジェクトに使われます。

B. グリーン・フォー・アフリカ募金 (2月小計520,270円)

アフリカの土壌回復、農業、植林等に使われます。

C. カンボジア募金 (2月小計 1,393,800円)

カンボジア国内の復興のために使われます。

D. タイ募金(奨学金・スラム・農村) (2月小計611,000円)

タイの人々の生活向上のために使われます。

E. ラオス募金 (2月小計 266,243円)

ラオスの生活改善、プログラムに使われます。

F. ベトナム募金 (2月小計 5,500円)

ベトナム帰還者及び国内復興のプログラムに使われます。

G. 定住難民募金 (2月小計 2,000円)

定住難民のための日本語教材費と家庭訪問員の交通費に使われます。

H. 環境募金 (2月小計 35,000円)

環境を守るためのプログラムに使われます。

I. JVC運営経費募金 (2月小計 39,800円)

現場を支えるのに不可欠な事務運営経費、人件費に使われます。

J. 無指定募金 (2月小計 183,092円)

▶ **送金の方法**—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。

東京9-27495 (募金種目名をご記入下さい)

加入者名—JVC東京事務所

編集後記

▶ **インドシナ三国が変わろうとしている。**自由化とカンボジア和平への動きも進んでいる。そんななかで、JVCはベトナムでもプロジェクトを始め、インドシナ難民の母国すべてに活動が広がった。三つの国がより身近なものになった。それはJVCの活動地が増えたためだけではなく、インドシナ三国の問題が社会主義の問題から、南北の構造上の問題に置き換えられてきたことと関係する。これらの国々に対し、私たち日本人がもはや部外者ではなく、南北問題の一方の当事者になってきているからであろう。(谷山)

犬養道子・「みどり一本」募金

東京0-212497 (2月小計196名1,186,673円)

犬養道子さんの御厚意により、JVCに上記の口座を設けました。この募金はエチオピアの植林プロジェクトに使われます。

Trial & Errorは再生紙を使用しています



1990年2月20日発行(毎月20日発行)

編集 谷山博史、熊岡路矢、前川昌代

発行人 木村雄

発行所 日本国際ボランティアセンター(JVC) 東京事務所

〒113 東京都文京区湯島3-1-4 会田ビル5階

☎03(834)2388 FAX:03(835)0519

Telex:7604025 JVCHQ UC

神奈川事務所 〒231 横浜市中区山下町2 産業貿易センタービル9F (財)神奈川国際交流協会内
☎045(671)7082

印刷所 ㈱ベスト・プリンティング

※本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。